第一節　丸山真男と政治的リアリズム

東日本大震災から三か月後、スペインでカタルーニャ独立派が実現した村上春樹はどのように語った。その後、この発言が激しい賛否の渦を巻き起こしたことは周知のとおりであるが、これを単に原発論争の一端として軽浮化してとらえることは、その背景にある重要な示唆を見過ごす危険がある。ここでは、村上春樹の論上視点を、丸山真男と比較することによって、批判することができる。丸山は「現実主義」に立脚するため、背景であり、現代の多様性に照応して、『既成実体への屈服』としての『現実主義』を徹底した『政治的リアリズム』を追究した。すなわち、リアリズムは立脚することにより、『現実主義』を駆逐しようとしていたのに対し、丸山の回答は、という对辯がもたらることを肯定した。

この議論の構図を理解するためには、丸山が「リアリズム」と「現実主義」のマークを区別することである。通例、現実主義とはリアリズム（仏語「légitimisme」）の訳語として用いられている。しかし、かえる用法を丸山は殆ど用いていない。詳細は本論に譲るが、丸山が「リアリズム」と謂う時、それは現実と規範の緊張

論　説

（法政研究 78 - 3 - 60）406
丸山真男における「リアリズム」と「現実主義」（大賀）

関係を意識し、規範の現実化を回避しながら、具体的状況に基づいた政治的判断を行うことを意味している。それに

一方で、とりわけ「リアリズム」という言葉がある種の偏見や誤解を伴って、通俗的なマキアベリズムや国際関係の

特殊な観念として理解されている今日において、丸山の「現実主義批判」を考察するだけでは彼の思考模型への接近としては不明である。丸山がどのように「現実主義」を論じ、「リアリズム」を評価していたのかが明らかとされなければならない。

大日本帝国の実在よりも戦後民主主義の虚妄に賛辞」と唱破した丸山は、「リアリズム」という概念を丸山の中で独特の位置を占めている。『夜店』と呼

うろうの彼の時事評論の中で「リアリズムの欠如」を憂慮したもののは少ないわけではない。積極的にリアリズムの重要性を主唱

している論説もある。何よりも、唯一の「政治学」講義となった一九六〇年の東大法学部講義は「政治的リアリズム」

かは始まり、社会の状況認識を強調した構成となっている。

この問題は、これまでどのように理解されてきたのであろうか。すなわち、従来の研究は、丸山の「リアリズム」を

どのように捉えていたのであろうか。研究上の解釈や評価という行為がどのように現れるかであるよう。この問いに一義

的な回答を導くことは難しい。先行研究の多くは極めて異った丸山の「リアリズム」観を提起しているからである。

そこで、丸山の「リアリズム」批判の先駆けであるという立場である。中西寛は日本の国際政治学史を俯瞰した論稿の中で、丸山や久

野栄、坂本義和らの「後平和主義」と高坂正樹、永井洋之助、神谷不二、衛藤藩吉等の「現実主義」を対置している。
また村田晃明は、丸山の「支配的対立の文脈からの理解」論文をリリズムの一元性・イデオロギー性を告示する所論として理
解している。すなわち、この解釈において丸山はリリズムの批判者として捉えられているのである。

第二の解釈は、これとは逆に丸山におけるリリズムの側面を積極的に肯定する立場である。丸山の議論を再提起
するが孫歌は、「市民の立場からの政治学」という丸山の課題意識において「パブリックな政治への対応」と「政治的リ
リズム」の思考を国民一人一人が身に付けることの重要性を論じていた。同様に丸山も、リリズムを多層的・多
元的な象徴空間の中で、市民の存在を示唆していた。丸山の論点は、市民が立場を保つためのリリズムの読
解をyrıcaキリストである。その上で、酒井は正義論批判としての「シュミットのリリズム」、更に両者のリリズムを媒介するものとしての「福
沢のリリズム」、ここでは理想と現実の従来という「高度なプラグマティズム」が示唆されている。しかし、
この議論は、丸山において大きなブロックの側面に弁証法的な調和を保持しているという主張ではなく、複数の
契機の組み合わせを示唆するものである。すなわち、一方で「福沢のリリズム」に大きな比重が置かれているものの、他方
で「シュミットのリリズム」（規範理論）はやや未成熟さが残るという評

（法政研究 78-3-62）408
丸山眞男における「リアリズム」と「現実主義」（大貫）

価を下している。本稿の立場は第二・第三の解釈の中間値に近いが、簡単にこれらの議論を検討しておこう。第一の立場は、所謂リアリズム対理想主義（または戦後平和主義）との対置のなかで丸山の現実主義批判を位置づけており、同時代的な思想のそうよろしくも丸山の「リアリズム／現実主義の対置は、理想やイデオロギーの問題ではない、学説史の観点からしか回答し得ない性質のものである。後述するように丸山は複数の論説において「政治的リアリズム」の欠如を憂慮または非難しているが、丸山においてリアリズムないし現実主義という語が登場するのは国内外の文脈を比してかなり早く。それは政治的リアリズム／現実主義の学説の形成の過程を示すものであるため、丸山が彼を範としてリアリズムや現実主義を理解していたとする考え難い。彼の解釈も帝国主義政策に関するものであるため、丸山が彼を範としてリアリズムや現実主義を理解していたとする考え難い。また丸山は「政治的リアリズム」を引用しているが、この引用は初版からものであり、且つその内容は帝国主義政策に関するものであるため、丸山が「三社平和について」（九五〇年）や「現実主義の陥没」（九五二年）の時点で、国際政治学において形成途上にあるリアリズムの特徴を参照していた可能性は極めて少なく、またたとえ丸山が英語圏の国際政治学研究に精通していたとしても、当時の日本の文脈ではリアリズムや「現実主義」という術語は異なった言感で捉えられ
たはずである。

つまり、それらの同時代的な状況を踏まえるならば、丸山がリアリズム／現実主義を論じたとき（それは一九五〇年代の学会・論壇を含む）にも急速に受容されるリアリズムないし現実主義とされるが、それは丸山の造語と考えた方が良いであろう。それは一九五〇年代の学会・論壇を含むものである。

また第二・第三の解釈は、それ自体としては説得的であり、それが何か大きな異論ではないが、本稿の問題設定に即して言

論争期から安保闘争期に至る彼の言説群を体系化して把握するという方法論上の構えが窺われる。結論を先取りするな

 바로、丸山の言説を意味づけると

した側面が考えられているのではないか、というのが本稿の問題意識であるように過ぎない。したがって、考え方は、丸山の言説を意味づけると

丸山においてリアリズム／現実主義といった対置が如何にして形成され、どのように変容してきたのか、その過程を考

察する上での、彼の国際政治論におけるリアリズム／現実主義の位相の変遷を追いかけての丸山の論点論は腐綿的に錯綜しているかのような印象がある。つまりリアリズム的認識の欠如によって
第二節　丸山真男におけるリアリズムと現実主義の位相

丸山が示す「リアリズム」や「現実主義」に関して語っているのは前述「現実主義」の内容（九〇八年）、『政治学講義』（九五〇年）などである。周知のように、「現実主義」の批判が導かれている。なお「現実主義」いう言葉は用いられてはいないが、この「既成事実への屈服」という概念が初めて登場するのは、「軍国支配者の精神形態」（九〇九年）においてである。

同論文において、軍国主義の指導者たちを「自分まで追いだしたスローガンにいつも引きこまれて、現実認識を塗抹したままである」と強調で非難し、それこそがまさに「自己欺瞞」という根拠として、『既成事実への屈服』という位相が意味づけられている。

それらの状況認識においては、既成事実とされている現象が望ましいのか否かを批判的または規範的に検証するのではなか、それが既に事実として認識されているから、そのことを根本としてかかる現実が承認されるのである。こうした知的態度こそが、後に丸山が「現実主義」と呼ぶものの原型を構成する。

ここで「現実」というものは常に作り出されつつあるもの或いは作り出され行くものと考えられないで、作り出さ
これと同様の認識は、岩室の「同様の識知の欠如という概念が、思想史の接近と心理的接近の二つの方法からアプローチされている」（九四六年）においても認められている。このことは前述「軍国支配者とその精神形態」における「自発でまきかじしたスチームにいう一節を想起させる。すなわち、国家を倫理や道徳の

（法政研究 78-3-66）412
丸山真男における「リアリズム」と「現実主義」（大賀）

源泉であると考えるならば、その国家の行動は、その内容の如何を問わず、常に正当化されることとなる。言い換えれば、国家が倫理的に絶対化している領野においては、リアリズム的な現実認識は生まれ余地がない。正当化されうわけである。

日本の帝国は、本質的に悪を為し能わざる故に、如何なる暴虐な振舞も、いかなる背信的行動も許容される」とい

権力政治は、権力政治としての自己認識があり、国家利害が国家利害の問題として自覚されているかぎり、そこに
は同時にそうした権力行使の利害の「限界」の認識が伴っている。これに反して、権力行使がそのままで、道徳倫理の実現であるかのように、道徳の言辞で語られれば語られるほど、そうした「限界」の自覚はうすされて行

また、この時期の丸山の重要な論功には「倫理学門」（九四九年）と「近代日本思想史における国家理性の問題」（九四九年）がある。両論共に当時の丸山の認識論を追う上では非常に示唆的で重要なテクストである。ここでは注目

413 (78 - 3 - 67)
論

されるのは、政治または国際政治における「理想」と「現実」の位相が、弁証法的調和の中で理解されていることである。

一方で、『政治学入門』は、『権力・倫理・技術』の三つの次元の弁証法的契機が論じられている。「権力」としての政治とは、権力政治論に見られるようなアメリカ式な政治の契機、「倫理」としての政治とは、倫理的な観点で政治の契機を理解するものとして、技術論としての政治が論じられている。更に、市民生活と日常的に接触する技術的側面が重視され、むしろ行政学と発展するようになる。

こうした弁証法的構成が同様にとられているのだが、近代日本思想史における国家理性の問題である。本来、同論文は、福沢を含めた『国権論』の思想家、陸羯南などの国権論者、陸奥宗光などの実際政治家などを検討することで、国

家理性の系譜を明らかにすることが企図されており、とりわけその主眼は、権力の「自己抑制」とも呼ぶべきものを解

明することであった。ここでは、国際社会の両義性とバランスが論じられている。同論文は冒頭で、一方では

国際平和の理想と戦争の罪悪、といった規範命题が叫ばれ、他方においては「力は正義を構成するという恥知らずな命題」

が聴聞通っているのが国際社会である、とその両義性を調和している。その上で、国際社会の理想と現実の弁証法的調

和が強調されている。

以下同論文は、『国家理性観念の歴史的条件』と『福沢論吉・国家平和観念の確立と国家理性思想の早熟の成長』の

二節から議論を展開していく。前者においては、朱子学内の内在化ある種の自然法観念が示され、後者においては、『学問のすすめ』を引きながら福沢における個人

に国際社会の規範が受容されてきたのかが論じられ、後者においては『学問のすすめ』を引きながら福沢における個人

(法政研究78・3・68) 414
自由平等の個人によって支えられた国家は、国家平等原則に基づくハーモニアであるという認識で導かれ、なわち、個人の平等と国家の平等とは決して単なる比喩ではなく、平和を超最大の価値とする理想主義的な立場は、戦争が原力戦争の段階に到達したと同時に、「理想主義」と「現実主義」という二つの軽大さに示された、三つの平和についてにおいても認められる。同調し、ここで注意すべきことは、同じ条件下において現実主義は「既成事実の屈服」という意味ではない、リアリズムである。
論

寧ろ、これを理想主義／現実主義との二元論として捉えると、『単一世界政治や外交の問題を、複合的・条件的でない』理由で問題設定の側面であり、伊デオロギーの位相ではない。さなが、現実世界の動向は、言うまでもなく、伊デオロギーも世界観が唯一の規定者ではない。したがって、『とくにある』一つの伊デオロギー的対立の枠を絶対化して、他の事種の伊デオロギーの位相を無視するという意味で、伊デオロギーと現実主義を論じると、その間の既成事実／現実主義の隣接（一九五六年）による均衡崩れ、既成事実への屈服（言うまでもなく、伊デオロギーとの対立が唯一の規定者である）において、丸山は現実主義の特徴を次のように説明している。第一、現実の『所与性』である。すなわち、現実の二元論は、特別な場合において、既成事実に対する屈服せよ。したがって、現実を構成している様々な、多種多様の要因が無視され、現実の、一つの側面だけが強調される。
丸山真男における「リアルリズム」と「現実主義」（大賀）

現実の「政治性」を強調したもので、「すなわち、その時々の支配権力が選択する方向が、すぐれて『現実的である』という位相である。」

同論文においては、「現実主義」という言葉が明示的に導入され、「軍国支配者の精神形態」と『現実主義』における現実を論じている。その意味で、丸山の『現実主義の隠蔽』論文は、リアリズム批判ではなく、逆にリアリズムの中に現実の構成が示されるべきである。この観点があっただけではないのである。

更に、こうしたリアリズムへの丸山の評価が急激に上がるように九五八年の『政治的判断』である。この論文は一般市民の政治的成熟を説いたものであるが、注目されるのはかかる政治的成熟を政治的リアリズムから論じようと試みていくことである。

『政治的判断』においては政治そのもの的内容ではなく、政治についての『思考法』が対象とされている。なぜなら、民主化の社会においては政治的な選択と判断が必要とする人々の層が拡大し、またその機会も増加するため、政治についての『思考法』が極めて重要な位相を構成するからである。かかる政治の思考法において、丸山が最も強調するのものが『思考法』である。したがって同論文では、最も明瞭に政治的リアリズムに現実主義を対置して次のように述べている。

のリアリズムと現実主義を対置して次のように述べている。
ここは現実というものの持っている多元性、もしくはわれわれの思考が、果て問題のどのレベルで考えられていてるかというレベルの多層性というものを無視して、これを一般的・抽象的な命題に還元する思考法は典型的によく出てくる。それは私にいわれば、政治的リアリズムの思考法から遠い考え方です。

丸山は同論文においてリアリズムを明示的に定義しているわけではないが、ビスマルクの謂う「可能性の技術」としての政治との関係において、リアリズムを意味づけている。それにちなれば、現実というものを固定した、でき上がったものとして見ないで、その中にあるいろいろな可能性のうち、どの可能性を伸ばしていくか、そういったことを政治の理想に、目標に、関係づけていく考え方で、これは完全な「方向性的認識」が生まれ得るという。繰り返しになるが、この議論においては理想と現実の弁証法的調和は後衛に退き、現実主義と政治的リアリズムの対置がせり出していて、こうした議論が未だ先鋭化するのだから、政治学講義（九六〇年）である。

第三節 丸山政治学における政治的リアリズム
捉え、権利と倫理を媒介するものとして技術が位置づけられていることからも明確のように、三者の弁証法的構造に
よって政治を把握しようとする試みである。おそらくは「政治の世界」も同様の問題構成から執筆されており、同書で
主眼としているのである。すなわち、「政治学入門」と「政治の世界」も同様に権力の樹立・単純化・政治的判断（九五八年）の主旨である。すなわち、ここでは「市民の政治学」における市民の政治的成熟を
的リアリズムと関連付けて丸山は理解していると考えることができる。

一九六〇年の『政治学講義』には立ちかえると、同講義においては、同年五月の高松通敏との対談『政治学の研究案』におけるマルクスの立場から状況を操作する技術を考慮する政治学を提起している。丸山は、市民のための政治学の限界を吐露して、丸山は、市民のための政治学の現状を誠実に読めるのは、イデオロギーの『沈黙化』である。つまり、イデオロギーから科学の独立というものを、少なくとも以前ほどは強調する必要がなくなったということである。したがって、これが直接に、科学としての政治学の重要性が低下したのでではなく、文脈が変化したことによって、敢えてそれを強調することの意義が失われたという。政治学の重要な特性が、科学としての政治学が支配を失ったということは、まるでそれにありえないものであろう。丸山は一方で、市民のための政治学を構想し、他方では、市民のための政治学を構想し、他方でそのことが『既成事実化』することにも慎重であった。そのようにして考えたならば、丸山の『政治学講義』が、政治的リアリズムの

（法政研究 78-3-74）420
状況認識から開始されている出来事の示唆は極めて重大であると言わなければならない。市民のための政治学を無批判に前提として、目標とするのは避けて通れない。それはデモクラシーの現実主義に他ならないからである。したがって、リアリズムは政治的思考の現実主義化を駆逐する最も適当な道具としてしか現われることとなる。

具体的に講義内容を見ていく。同講義は一・政治的思考の諸特性・態度・意見および行動・集団とリーダーシップの政治過程・政党および代表制・統治機構・統治構造論・政治体の均衡と変動の各項から成る。講義の目的は、一・政治的判断の問題意識を、それを簡潔に要約した構成となっている。

具体的に講義内容を見ていく。同講義は一・政治的思考の諸特性・態度・意見および行動・集団とリーダーシップの政治過程・政党および代表制・統治機構・統治構造論・政治体の均衡と変動の各項から成る。講義の目的は、一・政治的判断の問題意識を、それを簡潔に要約した構成となっている。
政治的リアリズムは、日和見主義的ではないが、つねに日和見であることを要求する。いわゆる状況追隨主義は、状況の操作的なものとして捉えるのが、ない政治的リアリズムの反対物にすぎない。などを述べながら、「状況の可変性・推移性」を強調している。すなわち、「状況をある凝固した現実、所与の現実として捉えずに、もっと可塑的なもの、操作的なものとして捉えるのが本当の政治的リアリズムなのである」、また「力は正義なり」、といった力関係至上主義と政治的リアリズムが似て非なるものであることが述べられ、「もっと可塑的なもの、このような関連で言えれば、リアリズムにおける状況認識は、人間性における天使と悪魔の同時存在という問題と対応している」と述べた上で、「この両権利の一方を絶対化する考え方、あるいは両者がEntweder-Oder、「あからこからの二者択一」としてしか捉えられない考え方、その限りで政治的リアリズムから遠ざかるといわばならばぬ」と論じてい
丸山貴男における「リアルリズム」と「現実主義」（大賀）

その際、一定の手段の現実の可能性が高くて、そのコストがあまりにも高いときは、目的の実現を無意味にする、という洞察に支えられなければならない。さもなくと、ヒューマニズムに仕えるはずの政治行動から、おそらく非人間的結果が出てくる。

丸山における「政治的リアリズム」の最も実現されたかたが、ここに現われている。リアリズムとは多様な可能性が特定の具体的状況や役割（抽象化・一般化された状況や判断を含んでいる）を承認することにある。正しい意味での政治的リアリズムは、そこに発酵する。政治的なるものの不可避性と限界を知ること

更に、次の言葉で第一講が締め括られている。
第四節
「三醇人経済問題」論文規範と現実の多層性

やや深遠した論理展開ではないものの、ここにひとつの論点が浮かび上がっている。すなわち、一方で状況認識の馬
学としてのリアリズムがあり、他方でそれをひとつの手段とし、目的や方法といった他の判断との弁証法的な調和へと
向かっていく政治論である。確かに丸山の所論において、リアリズムの位相の重要性は看過し難い。しかし、同時に弁
証法的な調和の中で政治を捉えるという企図も、丸山においては放棄されていない。これを掘り下げたため、最後に丸
山の弁証法的論を代表するものとして「日本思想史における問答体の系譜」「三醇人経済問題」の位置づけ「一九七七年」を
見ていこう。同論において、丸山は中島光民「三醇人経済問題」の弁証法的機会において意味づけている。

同論は、前半において仏教書から明治期の啓蒙書までの「問答体」の系譜について俯瞰し、後半において「三醇人
経済問題」に着眼して論を展開している。なお同論は、もともと一九七五年に桑原武夫を中心とした連続講義に端
を発しており、この中で丸山の講話は「日本思想史における問答体の系譜」と題して「三醇人経済問題」の補論という
方の位置づけという観点が示されたものである。丸山は従来の「問答体」を俯瞰して、多くの場合にそれが問答の形式であることに着眼する。その上で、プラト
ノの「対話篇」と比較しながら、従来の二問問答の著作が概ね絶対的真理を前提とし、それを導く手段として対話体
「法論」またはカテゴリスクの伝統を用いているのに対して、「三醇人経済問題」は三者対話で、しかも一問
答体ではなく、一人の話が非常に長い。
丸山真男における「リアリズム」と「現実主義」（大賀）

た丸山は、豪傑君／洋学紳士／南海先生は特定のイデオロギーを代表しているのではなく、複数の観点を提示していりと述べている。すなわち議論が「まったく対立しているのではなく、非常に共通した面もある。紳士君が言っても少しおかしくないような議論を、豪傑君が展開している所もある」とした上で、彼は「何かのイデオロギー的立場を代表しているのではないか、この三人の対話を通じて複数の観点、色々な角度からのスパットライブが投入されている」と論じている。

しかし、だと思います。これは論争的な「原理原則からの天降りたな演繹」を拒否し、政治理念の「歴史的所与性が強調されている」ということである。民主政が捉え難い政治体であったとしても、専制政治から一足飛びに民主政治に移行することはあっても、過程自体を歩むということは単なる無理である。南海先生の発言がこれを示している。その意味で、「兆民の具体的状況にたたった実力」を評価している。

最後に丸山は、豪傑君の議論が明治後半期から勃興し、太平洋戦争において絶頂ににおける国体論と断絶している点にも着眼している。
理論は灰色で、生活は緑だ

（Das Leben ist grün, und Grau ist die Theorie）

これは、現実の無限の豐かさと、複雑さにたいして距離をおかないで、直接的にそれを抱擁しようという審美的態度である。灰色を灰色と知りながら、つまりこれは落ちるものの意味と価値を知りながら、あえて断切して、現実を論理的に再構成するの理論の態度である。

理論と現実の二分法を認めない丸山らしい説明であろう。つまり理論とは、現実を人為的に構成したものであるが、理論の限界を知りつつ、理論と現実を切り離すことなく、距離を置いた態度を維持するのが理論の態度である。丸山におけるリアリズムも、理論と現実を切り離す状況を、入り込むリアリズムと相互に矛盾するような可能性も包含され得るものである。

論
杉田敦解説『丸山真男という多面体』同編『丸山真男セレクション』平凡社2000年
三十八頁
集⑦
三五頁
集④
二八頁
同右
一九頁
同右
一七頁
同右
三一頁
同右
三九頁
傍点原文

(法政研究 78-3-82) 428
丸山真男における「リアルズム」と「現実主義」（大賞）